一般社団法人　大学英語教育学会（JACET）

第 40 回（2026 年度）中部支部大会プログラム 第一版

The JACET 40th (2026) Chubu Chapter Annual Convention, Version 1.0

大会テーマ

越境する言語使用と異文化間コミュニケーション
― 大学英語教育を超えて

Transcending Language Use and Intercultural Communication
— Beyond University English Education

2026 年 6 月 27 日（土）
開会時間：午前 10 時
名城大学　ナゴヤドーム前キャンパス
〒461-8534 名古屋市東区矢田南 4-102-9

一般社団法人　大学英語教育学会（JACET）
第 40 回（2026 年度）中部支部大会

越境する言語使用と異文化間コミュニケーション ― 大学英語教育を超えて
Transcending Language Use and Intercultural Communication
― Beyond University English Education

一般社団法人大学英語教育学会（JACET）第 40 回（2026 年）中部支部大会

●日　　時：　　2026 年 6 月 27 日（土）　10:00-17:00
●会　　場：　　名城大学　ナゴヤドーム前キャンパス
〒461-8534　名古屋市東区矢田南 4-102-9　電話：052-832-1151（代）
●受　　付：　　南館 1F　入口（9:30 開始）
●大 会 本 部：　　DS203（南館 2F）
●来賓者控室：　　DS203（南館 2F）
●会員休憩室：　　DS102（南館 1F）

●プログラム
10:00 - 10:05　開会行事　DS201（南館２F）
支部長挨拶　　藤原康弘（名城大学）

10:10 - 11:50　研究発表（南館２F）　第 1 室（DS201），第 2 室（DS202）

12:00 - 13:30　昼食休憩
13:00 - 13:30　中部支部役員会　DS203（南館２F）

13:40 - 13:55　中部支部総会　DS201（南館２F）

14:00 - 15:00　基調講演　同上
15:10 - 16:50　シンポジウム　同上

16:50 - 17:00　閉会の辞　同上
副支部長　　梶浦眞由美（名古屋市立大学）

17:30-　懇親会　M PATIO（北館 1F）

10:00 - 17:00　出版社展示　DS201, DS202, DS203 前

研究発表　　10：15－11：50

第 1 室（DS201）

10：10－10：40　　司会

イタリア CLIL 海外教育研修プログラムの継続調査／Follow-up Study on the Italy CLIL Overseas Education and Training Program

安達　理恵（椙山女学園大学）

10：45－11：15　　司会

日本人英語学習者の知覚流暢性と発話流暢性の非線形関係の検証：擬似データによるシミュレーション Examining Nonlinear Relationships Between Perceived and Utterance Fluency in Japanese EFL Learners: A Simulation Study Using Pseudo-Data

三上　綾介（愛知学院大学）
小林　真実（名古屋大学）
橋崎諒太郎（松山大学）
広瀬八重子（東海学院大学）
脇田　久美（名古屋大学）

11：20－11：50　　司会

The Effects of TBLT with Immediate Corrective Feedback on Explicit and Implicit Knowledge of Past Tense Verbs

Shiona Naruse（Nagoya University）

第 2 室 (DS202)

10：10－10：40　　司会

学校文法における否定辞繰り上げの扱いに関する一提案：言語使用、異文化間コミュニケーション、比較言語学の視点から／A Proposal on the Treatment of Negative Raising in School Grammar: From the Perspectives of Language Use, Intercultural Communication, and Comparative Linguistics

川口　健太（南山大学）

10：45－11：15　　司会

日本語訛り英語への適応を促す短期訓練の効果検証

天野　直亮（神奈川大学）

11：20－11：50　　司会

異文化理解と英語学習意識の形成に関する予備的考察/A Preliminary Study on the Formation of English Learning Attitudes in Relation to Intercultural Understanding

佐々木 恭介（桜の聖母短期大学）

支部総会　　13：40 - 13：55　　DS201

基調講演　　14：00 - 15：00　　DS201

司会

異言語間コミュニケーションの多様性とその中での英語の役割

木村護郎クリストフ（上智大学）

休憩　　15：00 - 15：10

シンポジウム　　15：10 - 16：50　　DS201

司会

講演

多文化・多言語組織における言語教育の設計—メルカリの実践と AI-Native 組織に必要な言語能力—

親松　雅代（株式会社メルカリ）

越境する英語使用に向けた ELF 志向カリキュラムの設計—大学における実践と学生の認識変化から—

鈴木　彩子（玉川大学）

閉会の辞　　16：50 - 17：00　　副支部長　梶浦眞由美（名古屋市立大学）

懇親会　　17：30-　　M PATIO（北館 1F）

発表要旨
第１室：DS201

イタリア CLIL 海外教育研修プログラムの継続調査／Follow-up Study on the Italy CLIL Overseas Education and Training Program

安達　理恵（椙山女学園大学）

発表者は、初等教員養成課程の学生に対し、CLIL（内容言語統合型学習）を紹介し、2023 年度からはイタリア海外教育研修プログラムも開始した。内容は、学年末に 10 日間～2 週間イタリアに行き、複数の小学校で日本文化を英語で紹介する授業実践と、美術館でアート作品の鑑賞方法を英語で学ぶワークショップへの参加を主としている。研修では、学生の CLIL に関する指導意識、異文化間コミュニケーション態度、外国語学習意欲などの向上を目指しているが、実際にどの程度これら目的に沿った効果があるか調査も続け、プログラム参加前と参加後に、Google Forms で選択式 20 問と記述数問を尋ねている。安達（2026）では、2 年間の研修に参加した学生の効果を確認した。今回は、2025 年度参加の学生も加え、合計 21 名を対象にした調査結果を報告する。結果として、CLIL についての理解を深め、海外適応力や外国語学習に対する自信等が向上したことが改めて確認できた。また、記述項目については KH コーダーを用いたテキストマイニングと質的分析の結果、外国語への学習意欲などが認められたが、実践上の課題なども含めて報告する。

日本人英語学習者の知覚流暢性と発話流暢性の非線形関係の検証：擬似データによるシミュレーション Examining Nonlinear Relationships Between Perceived and Utterance Fluency in Japanese EFL Learners: A Simulation Study Using Pseudo-Data

三上　綾介（愛知学院大学）
小林　真実（名古屋大学）
橋崎諒太郎（松山大学）
広瀬八重子（東海学院大学）
脇田　久美（名古屋大学）

外国語スピーキングにおいて流暢性は包括的なスピーキング能力を予測する重要な要因の一つとされる。そのため、聞き手による流暢性の評価（知覚流暢性）に影響を与える具体的な発話の流暢性指標を特定する必要がある。先行研究では、発話速度、ポーズ、言い直しなど複数の発話流暢性指標と知覚流暢性との関連が報告されてきたが、多くは影響が段階を問わず一定であると仮定する線形モデルに基づいており、段階に応じて影響が変化する非線形性は十分に検証されていない。本研究では、日本人英語学習者の発話データに関する先行研究の統計量を基に擬似データを作成し、知覚流暢性および発話速度、節中無声ポーズの頻度・長さ、節間無声ポーズの頻度・長さ、節間有声ポーズの

頻度、言い直しの頻度の７つの発話流暢性指標との関係を一般化加法モデルにより分析した。その結果、節間有声ポーズの頻度と言い直しの頻度を除く５指標が有意であり、４つの無声ポーズ指標では非線形関係、発話速度では線形関係が確認された。以上の結果から、発話速度はどの習熟段階でも指導が有用である一方、無声ポーズは習熟段階に応じて指導の効果が異なる可能性が示唆された。

The Effects of TBLT with Immediate Corrective Feedback on Explicit and Implicit Knowledge of Past Tense Verbs

Shiona Naruse (Nagoya University)

Task-based language teaching (TBLT), an approach that promotes language development through meaning-focused communication while attending to form (Ellis, 2020), has attracted considerable attention in SLA research. One of the techniques of such form-focused instruction is corrective feedback (CF; Li et al., 2016). However, questions remain regarding the timing of CF. Although previous research suggests that immediate CF may be more effective than delayed CF (Li et al., 2022), little empirical research has examined the efficacy of immediate CF in a meaning-focused context such as TBLT in relation to the development with the distinction of knowledge types. This study, therefore, investigates how the combination of TBLT and immediate CF develops explicit and implicit knowledge among Japanese university students.

Among the 55 participants, 39 Japanese university students completed all materials. The treatment group (N = 28) completed two dictogloss tasks and received immediate CF during the task performances. The control group (N = 11) completed the pretest, posttest, and delayed posttest with no classroom instruction. Grammaticality Judgement Test (GJT) and Elicited Imitation Test (EIT) were used to measure explicit and implicit knowledge of past tense verbs, respectively (Li et al., 2016, 2022). A pretest, posttest, and delayed posttest (one week later) were administered.

Mann-Whitney U tests with Bonferroni correction showed that despite no significant differences between the groups at all time points, small-to-moderate effect sizes were observed for the GJT at the posttest ($r = .32$) and for the EIT at the delayed posttest ($r = .27$).These results may suggest that the amount of instruction in the present study was sufficient for the development of explicit knowledge but not for that of implicit knowledge, lending support to the view that acquiring implicit knowledge requires more extensive L2 exposure (DeKeyser, 2015; Paradis, 2009; Suzuki & DeKeyser, 2015).

第２室：DS202

学校文法における否定辞繰り上げの扱いに関する一提案：言語使用、異文化間コミュニケーション、比較言語学の視点から／A Proposal on the Treatment of Negative Raising in School Grammar: From the Perspectives of Language Use, Intercultural Communication, and Comparative Linguistics

川口　健太（南山大学）

学校文法における「否定辞繰り上げ」（*I think it won't rain*ではなく*I don't think it will rain*を使う）に対する説明は、亘理（2003）も指摘しているように、日本語では「雨が降らないと思う」と「雨が降るとは思わない」のいずれも普通に使うことができることから、日本人英語学習者を困惑させるものの一つである。本発表の目的は、「否定辞繰り上げ」の問題を言語使用と異文化間コミュニケーションの観点から検討し、なぜ日本語では（英語ほど顕著には）否定辞繰り上げが見られないのか、という点を明らかにすることで、学習者の英語における否定辞繰り上げの理解を促すことである。具体的には、「思う」と*I think*のカテゴリーが異なる点（今井，2023）に着目しつつ、尺度の中間にあるものが否定辞繰り上げを許すという説（Horn，1989）を、「思う」に当てはめて検証した。分析の結果、「思う」は英語の典型的な否定辞繰り上げ動詞とは異なる性質を持つということが分かった。この結果をうけて、本研究では、学習者は英語の否定辞繰り上げ現象そのものの理解に加えて、「思う」と*I think*の相違点を理解する必要があることを示す。

日本語訛り英語への適応を促す短期訓練の効果検証

天野　直亮（神奈川大学）

英語の多様化が進む中、日本語訛り英語を含む多様な英語変種を聞き取る力は重要性を増している。本研究では、日本語訛り英語への短期的な曝露と字幕提示が聞き手の適応にどの程度有効か、また適応が音素レベルで見られるかを検討した。参加者は英語母語話者 60 名、非母語話者 60 名の計 120 名で、事前テスト、訓練、事後テストに参加した。訓練では、日本語訛り英語または北米英語を、字幕あり・なしの 4 条件で提示した。テストでは、書き取り課題により intelligibility を、9 段階の Likert scale 評定により comprehensibility を測定した。結果として、全体としては事後テストで成績向上が見られたものの、日本語訛り英語への曝露および字幕提示による明確な訓練効果は限定的であった。また、英語母語話者は非母語話者より intelligibility の向上が大きかったが、その差は小さかった。さらに、特定の音素に対応した明確な適応は確認されなかった。以上より、短期的な曝露訓練のみで大きな適応効果を得ることは難しく、理解の改善は主として音素・語レベルを超えた知覚・処理水準で生じる可能性が示唆された。

異文化理解と英語学習意識の形成に関する予備的考察/A Preliminary Study on the Formation of English Learning Attitudes in Relation to Intercultural Understanding

佐々木 恭介（桜の聖母短期大学）

母語話者規範を再考し、多様な英語のあり方を認める「国際共通語としての英語」（English as a Lingua Franca: ELF）は、Jenkins（2000）や Seidlhofer（2001）らを中心に発展してきた。しかし、日本の英語教育においては依然として母語話者規範の影響が指摘されている。本研究は、地方短期大学における少人数英語クラスを対象に、ELF の観点から学生の英語学習意識の形成過程を分析し、異文化理解教育に資する授業デザインの可能性について検討することを目的とする。アンケート調査の分析から、学生の間にはネイティブ規範意識が依然として残存する傾向が見られる一方で、多様な英語使用を肯定する英語観も一定程度確認された。特に、進路意識と関連づけながら、英語を実用的なコミュニケーション手段として捉える傾向が見られた。本調査は、言語形式だけでなく、海外事情や異文化理解を促す教材選定や、地域性を踏まえた授業の設計・運営のあり方に示唆を与えるものである。

＜基調講演＞　DS201

異言語間コミュニケーションの多様性とその中での英語の役割

木村護郎クリストフ（上智大学）

「日本人とは日本語、外国人とは英語」という二重の単一言語主義は、もはや現実的ではなく、場合によっては効果的な意思疎通の妨げになりかねない。異言語間コミュニケーション状況の多様性を意識して柔軟に対応する力を、コミュニケーション能力の一環として捉えることが必要となる。このように考えると、英語教育も国語教育も、ひたすらそれぞれの言語の技能を伸ばすという発想を乗りこえなければならない。能力開発だけではなく、能力制御が教育・学習課題となるのである。CEFR-CV（欧州言語共通参照枠・随伴版） における仲介活動の概念や、リンガ・フランカとしての英語使用、多言語社会における言語選択のあり方、さらには AI の急展開をふまえ、異言語間コミュニケーション能力の理論的枠組みを提示する。そのうえで、日本における英語教育の位置づけと意義を再提起したい。

講師紹介

木村護郎クリストフ（きむら ごろうくりすとふ）

名古屋出身。上智大学外国語学部教授・学部長、同大学院国際関係論専攻教授。一橋大学大学院言語社会研究科博士課程修了。博士（学術）。著書に『異言語間コミュニケーションの方法—媒介言語をめぐる議論と実際』（大修館書店）、『節英のすすめ—脱英語依存こそ国際化・グローバル化対応のカギ！』（萬書房）、共編著書に A language management approach to language problems: Integrating macro and micro dimensions. (John Benjamins)、『多言語主義社会に向けて』（くろしお出版）、『媒介言語論を学ぶ人のために』（世界思想社）、共著に『ことばをどう捉えるか—言語の自明性を問い直す』（ひつじ書房、近刊）、Language policy and planning (Bloomsbury)、『越境者との共存にむけて』（ひつじ書房）、『言語政策研究への案内』（くろしお出版）などがある。

＜シンポジウム＞　DS201

多文化・多言語組織における言語教育の設計―メルカリの実践と AI-Native 組織に必要な言語能力―

親松雅代（株式会社メルカリ）

株式会社メルカリでは、多様な文化的・言語的背景を持つ人材が協働する環境の中で、言語教育の設計と実装に取り組んできた。従来のように文型や語彙を積み上げる言語教育では、実際の職場における他者とのやりとりや業務遂行に十分には結びつかないという課題があった。そこで、CEFR の行動中心アプローチに基づき、文型中心の学習から「言語を使って何ができるか」を重視する設計へと転換した。その際、目標・活動・評価を一貫して CEFR に基づいて構成することで、教育設計全体の整合性を確保している。また、英語教育と日本語教育に加え、母語話者に向けた教育として「やさしいコミュニケーション」を第三の柱に位置づけた。これは、コミュニケーションの負荷を学習者だけに負わせるのではなく、母語話者を含む全員がその責任を分かち合うという考え方に基づくものである。これにより、言語レベルやバックグラウンドにかかわらず、誰もが安心して議論に参加できるインクルーシブな環境の実現を目指している。さらに、AI の進展によって異言語間のやりとりが容易になりつつある今日、組織に求められるのは、一人ひとりの言語運用能力にとどまらず、異なる考えを持つ他者と相互に調整しながら関係性を築いていく実践的な力である。こうした取り組みを通じて、多文化・多言語組織における言語使用の実態を示すとともに、AI-Native 組織に求められる言語能力のあり方を考える。

講師紹介

親松雅代（おやまつ　まさよ）

株式会社メルカリ Organization & Talent Development / Language Education Team 所属。外資系国際物流会社（ユーピーエス・ジャパン株式会社）を経て、2013 年より日本語教育に従事。留学生やビジネスパーソン、看護師・介護士候補者への日本語教育を担当。2018 年にメルカリへ入社。社内日本語プログラムおよびスピーキングテストの開発をリードするとともに、「やさしいコミュニケーション」研修を企画・主導。現在はリーダーシップ開発にも携わり、多言語・多文化環境における人材開発を推進している。

越境する英語使用に向けた ELF 志向カリキュラムの設計—大学における実践と学生の認識変化から—

鈴木彩子（玉川大学）

本発表は、越境的な英語使用が求められる現代において、大学英語教育がどのような役割を果たしうるのかを、ELF（English as a Lingua Franca）の視点から考察する。英語は多様な言語背景をもつ話者の間で共通語として用いられているが、そこでの相互理解は固定的な規範に基づくのではなく、話者間のやり取りの中でその都度形成されていく側面が大きい。このような英語使用の実態を踏まえると、大学英語教育では、言語能力の育成に加え、状況に応じて言語使用を調整し、他者と関係を築く力をどう育てていくかが問われている。こうした前提のもとで、ELF 志向の言語プログラム、留学経験、および英語の多様性を扱う授業を意図的に配置したカリキュラムを実施している大学の例を取り上げる。質問紙調査およびインタビューの分析から、こうした学習経験が、英語使用に対する理解を広げ、自身のコミュニケーション実践を肯定的に捉えることにつながっていることが分かった。一方で、英語に関する既存のイメージが依然として残ることも示された。これらを踏まえ、大学英語教育におけるカリキュラム設計の課題について考察する。

講師紹介

鈴木彩子（すずき　あやこ）

玉川大学文学部英語教育学科教授。ELT Journal「Key Concepts in ELT」セクション編集者。専門は共通語としての英語（English as a lingua franca, ELF）、言語教育学、異文化間コミュニケーション。著書に Developing ELF Programmes for Language Teaching: Innovation, Resistance, and Appications（De Gruyter, 2025、共編著）などがある。

大会会場　マップ

会場アクセス

地下鉄名城線「ナゴヤドーム前矢田」駅　２番出口　徒歩約３分
ゆとりーとライン「ナゴヤドーム前矢田」駅から　徒歩約５分
JR 中央線・名鉄瀬戸線・地下鉄名城線「大曽根」駅から徒歩約 10 分

キャンパスマップ

名城大学

〒461-0048 名古屋市東区矢田南 4-102-9　（ナゴヤドーム前キャンパス）
TEL: 052-832-1151（代）
http://www.meijo-u.ac.jp/

懇親会のご案内

懇親会は会場内北館の M PATIO で行われます。事前予約制です（会費一般　6,000 円，学生 4,000 円）。多くの方々のご参加をお待ちしています。予約は JACET 中部支部の参加申込フォーム（右の QR コード）でお申し込み下さい（懇親会申込締切：6 月 17 日（水））。

● **事務局からのお知らせ**

＊ 基調講演、シンポジウムのみ、オンラインで配信します。
＊ 非会員の参加者は資料代として一人につき 1,000 円の負担をお願いします（なお学生の方は学生証の提示で無料とします）。
＊ 出版社の展示は南館 2F で行います。
＊ 学外者への wifi 利用は eduroam のみがお使いになられます。
＊ 発表者で PC をお使いの方は，ご自分の PC をご用意ください。各部屋とも、モニターの準備があります。VGA ケーブル、HDMI ケーブル、音声ケーブルなどは利用可能です。Mac を使用される場合は VGA／HDMI アダプタをお持ちください。
＊ レジュメを配布する場合には各自 30 部程度ご用意ください。
＊ 当日、学食は営業していません。学内のコンビニ（ファミリーマート）は営業しています。飲料水の自動販売機は学内に設置してあります。なお、 近くのイオンモールナゴヤドーム前には多くの飲食店があります。
＊ ご利用いただける駐車場はありません。公共交通機関でお越しください。
＊ 当日、中部支部役員会を 13 時 00 分から DS203 で開催します。
＊ キャンパス内は禁煙です。
＊ 大会についてのご質問は、中部支部事務局（下記）までメールでお尋ね下さい。

● **JACET 中部支部紀要編集委員会からのお知らせ**

『JACET 中部支部紀要』第 23 号　投稿原稿を募集いたします。
投稿規程など詳細は必ずホームページで最新情報をご確認下さい。

投稿締切：2026 年 9 月 30 日（必着）

紀要に関する問い合わせ先：
JACET 中部支部事務局（紀要担当）　　jacet.chubu.journal [at] gmail.com

一般社団法人大学英語教育学会（JACET）中部支部事務局
〒422-8529 愛知県豊田市八草町八千草 1247
愛知工業大学　藤村敬次研究室内
jacetchubu[at]**gmail.com**